

平成12年度原子力発電所周辺環境放射能測定結果の概要

平成12年度に福島県及び東京電力株式会社が実施した原子力発電所周辺の環境放射能測定結果の概要は、以下に示すとおりであり、従来同様、環境安全評価上問題となるものはありませんでした。

1 - 1 空間放射線

- (1) 県が10地点、東京電力(株)福島第一原子力発電所が11地点及び福島第二原子力発電所が7地点でNaIシンチレーション検出器による空間線量率の常時測定を実施しました。各測定地点の年間平均値は、従来とほぼ同程度であり、有意の変動は認められませんでした。最大値の出現時には降雪が観測されており、すべて自然放射線レベルの変動と判断され、発電所に起因する線量率上昇は認められませんでした。
- (2) 県が12地点、東京電力(株)福島第一原子力発電所が16地点及び福島第二原子力発電所が15地点で熱蛍光線量計による空間積算線量の測定を実施しました。各測定地点の年間相当値は従来とほぼ同程度であり、発電所に起因する線量上昇は認められませんでした。

1 - 2 環境試料

- (1) 大気浮遊じんについて、県が3地点で全アルファ放射能及び全ベータ放射能の連続測定を、東京電力(株)福島第一原子力発電所及び福島第二原子力発電所がそれぞれ2地点で全ベータ放射能の連続測定を実施しました。各測定地点の年間平均値は、従来とほぼ同程度でした。最大値の出現は、いずれも気象要因による自然放射能レベルの変動と判断され、発電所に起因する測定値の上昇は認められませんでした。
- (2) 降下物、大気浮遊じん、陸土、陸水(上水)、海水、海底沈積物、農畜産物(15品目)、指標植物(松葉)、水産物(9品目)、指標海洋生物(ほんだわら)の中から、県が248試料、東京電力(株)福島第一原子力発電所が90試料、福島第二原子力発電所が88試料について、全ベータ放射能と核種濃度の測定を実施しました。

各環境試料の全ベータ放射能は従来とほぼ同程度であり、有意の変動は認められませんでした。

人工放射性核種として、セシウム-137が降下物、陸土、海水、海底沈積物、農畜産物(米、牛乳、豚肉)、指標植物(松葉)、水産物(かれい類、あいなめ、さけ、すずき、しらうお、こうなご、たこ)から検出されましたが、核実験の影響と判断される低いレベルでした。

また、陸水(上水)、海水からトリチウムが検出されましたが、過去の測定値の範囲内であり、自然及び核実験の影響と判断される低いレベルでした。
- (3) 降下物、陸土、陸水(上水)、海水、海底沈積物、農畜産物(4品目)、水産物(5品目)の中から、県が22試料、東京電力(株)福島第一原子力発電所が12試料、福島第二原子力発電所が11試料について、ストロンチウム-90濃度の測定を実施しました。このうち、陸土、陸水(上水)、海水、農畜産物(米、ほうれん草、大根、牛乳)、水産物(しらうお、わかめ、ほっき貝)から検出されましたが、核実験の影響と判断される低いレベルでした。
- (4) 降下物、陸土、海底沈積物、農畜産物(2品目)、水産物(1品目)について、県が12試料のプルトニウム放射能濃度の測定を実施しました。このうち、降下物、陸土、海底沈積物から検出されましたが、核実験の影響と判断される低いレベルでした。